



2012年のジャカルタ。利用者が線路に座り込む



大量のつぼに占拠されたミャンマーの国鉄。人も貨物もない

しかし、さすがにこのままでは首都の交通としてはふさわしくないため、ミャンマー国鉄は10年ほど前から鉄道の近代化を進めている。車両は、もちろん日本の中古車両である。北は北海道から南は九州まで、JRやローカル鉄道で不要となった気動車を導入。自動扉や冷房を完備した車両として好評だ。JR東日本とJR東海で廃車になった気動車が仲良く駅に並ぶ姿も見られ、不思議な光景にちよつと戸惑ってしまう。

△Profile△
しらかわ・じゅん
1964年東京都生まれ。日本や世界の鉄道取材するほか、エコツアーにも詳しい。鉄道や野生動物を求め、南極・北極圏を含む世界各地、120以上の国や地域を訪れる。雑誌各誌への執筆のほか、TBS系の番組「THE世界遺産」で鉄道関連監修を担当。著書に『全国鉄道博物館（JTBパブリッシング）』『御召列車』（マガジンハウス）など。

鉄道が近代化を遂げ、首都圏の重要な社会インフラとして育つ日を見届けるまで、これからミャンマー通いが続きそうだ。

中央駅に到着後、早速、近郊を約3時間で一周する環状線に乗ってみた。1時間に数本しか来ない列車のスピードは、時速20キロほど。扉が開けっ放しの小さな客車は、つぼを抱えた人々も乗り込み、飛び乗り飛び降りも自由。のんびりと流れる車窓風景は、百年前とさして変わらないのだろう。

者も働いており、日本語通訳としても活躍する。鉄道を通じた人と人との交流が、両国の絆を一層深めているのがうれしい。民主化の実現まで訪問をためらっていたミャンマーには、アウンサンスーチー女史の率いる政党NLDが勝利を収めたばかりの昨年暮れに、初めて訪問した。人々の顔は明るく、街中も至る所で新たな街の建設を進める槌音が響いていた。

一方、市内中心部の交通渋滞解消の切り札として今年1月10日に開通したのが、路面電車である。電車は、広島電鉄で昨年まで走っていた旧式の車両を3編成購入。およそ半年にわたって、広島から招いた技術担当者の指導の下、現地で整備、試運転が続けられた。

無事、ミャンマーの地で第一歩を踏み出した路面電車だが、運行は1日わずかに3往復と、まだまだおぼつかない。だが、乗り換えに便利ないように、環状線の駅まで乗り入れを行う計画もあり、やがてはヤンゴンの暮らしに無くてはならない交通機関となるのだろう。そして、電気技術を学んだ国鉄技術者が育てば、将来は環状線の電化計画も進められるに違いない。

るトロコだ。カラフルなバラッソルを差した人力トロコは、列車の本数が少ないのいいことに、国鉄の路線上で勝手に営業している。ただ、違法とはいえ庶民の足。なかなか撤去が進まない。事故の危険を回避しながら、日本の中古列車は警備も高らかに、マニラ市内で走り続けている。

電車が、次々とホームに滑り込む。インドネシアのジャカルタは、日本製中古電車の宝庫だ。4年前の訪問時には、利用者が線路の上に腰掛け、危険な屋根の上まで乗車していたが、日本の冷房車両を導入した後は、運転本数を増やすとともに、駅に警備員を配置して安全確保を実施。今ではマナーも向上し、すっかり近代化された。人口1000万都市となったジャカルタ市民の移動には、すでに無くてはならない交通機関だ。

この発展著しい首都圏鉄道の今後を見据え、インドネシア国鉄はJR東日本の技術者を招き、保守点検や整備の技術を磨いている。工場や車庫には、日本で研修を受けた若

Voice

28

アジアで活躍する日本の列車を求めて

トラベルライター・鉄道史研究家

白川 淳



フィリピンでは日本の中古車両が数多く走っていた

旅が好き。特に、鉄道に揺られて車窓を眺めつつ、その国の自然や文化、人々の暮らしを訪ねるのが楽しくて、トラベルライターを生業として、はや四半世紀が過ぎた。世界最長のシベリア鉄道、北極圏へと向かうスカンジナビア半島の路線、世界最南端の南米の港町の軽便鉄道など、思い出深い路線は数多い。そんな私が、今、取材を進めているのが、アジア各国で活躍する懐かしい日本製車両たちである。

しっかりと造り込まれた日本製の車両は、風雪に耐えて何十年も走り続けた後も、保守点検が行き届いた状態のため、整備をすればまだまだ活躍できる。1995年に130両を超える東京の地下鉄丸ノ内線の車両がアルゼンチンに譲渡されて以降、その評判を聞き及んだ国々から引き取り手が現れるようになった。こうして、JRの電車はインドネシアに、気動車はフィリピンやミャンマーに、ブルートレインはタイやマレーシアなどに送られ、第二の歴史を歩んでいる。

フィリピン・マニラ市を訪ねたのは、3年前のことである。国鉄本社で撮影許可を取り、トゥトゥバン（マニラ）駅構内に向かうと、そこにはJR東日本からやってきた気動車やブルートレイン、それに常磐線の電車など、懐かしい日本の車両の姿が並んでいた。

それぞれの列車の窓には、投石防止のため、物々しい金網が取り付けられている。路線の一部が、スラム街を通り抜けるためだ。実際、列車に乗り込み車窓を眺めていると、線路際まで家々が建つ場所があり、国鉄が安全運行維持に苦労していることが分かる。

もうひとつ、運行の障害となっているものが、「スケーター」と呼ばれる



フィリピンの線路を我が物顔で移動するスケーター